

友の会通信

vol. 8, No.4, 通巻 46 号 2004. 10. 2 発行

博物館周辺の身近な自然シリーズ(その6)

気がつけば、変わる！日常の景色

学芸員 出川 洋介

今年はキノコの当たり年だそうです。知り合いは、既に富士山でマツタケをとったとのこと。現地のプロも、今年は何年に一度かの当たり年だと言っているそうです。いざ富士山へ！と言いたいところですが、今日の話は「身近な自然」です。

毎年、キノコシーズンが到来すると、今年是不作だとか、当たり年らしいと言ったニュースが流れますね。このような判断は何に基づいているのでしょうか？ マツタケ取りの名人は秘密の場所を知っていて、家族にも漏らさないといひます。名人は以前マツタケを見つけた場所をよく覚えており、シーズンになると毎年そこに通って発生を確かめ、今年が多いとか少ないといった手応えを感じるのでしょうか。同じ場所に繰り返し通いつめて経験を積むと、初めての所でも直感的にマツタケの生えそうな所がわかるようになるそうです。自然観察においても、こういう「勘」をはぐくむことは重要かもしれませんね。

1999年の4月から、ボランティアの皆さんと博物館周辺の月例菌類調査を開始しました。紹太寺界限～吾性沢流域をフィールドにして5年目を迎え、メンバーたちもどこにどのようなキノコが生えるのか少しずつ勘が働くようになってきました。しかし、年12回の調査では拾いきれないキノコがたくさんあるはずですが。ボランティアの酒井きみさんはフィールドの一角にお住まいで、月例調査の合間をぬって、日々キノコを調べてくださいます。昨年、かねてから念願だったキヌガサタケを発見されました！ 調査をはじめて5年目にしてようやく見つかるというキノコもあるのです。酒井さんはキノコばかりでなく小さな変形菌、さらには顕微鏡を購入されてカビまでも観察されています。道路脇に座り込んでルーペでカビを観察す

目次

身近な自然シリーズ…… 1	“この一冊” …… 8
夏休みオープンラボ…… 3	何でも好奇心…… 9
岩石標本を作ろう…… 5	会員からのお便り…… 10
植物観察会フジアザミ…… 5	友の会NOW…… 11
水餃鬼を育てよう…… 6	サロン・ド・小田原…… 11
ナチュラ・ノート…… 7	行事案内…… 12

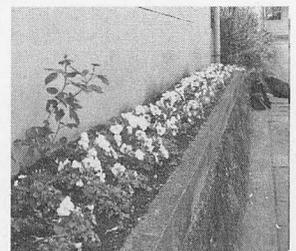
る酒井さんは近所でもすっかり有名です。まさに、入生田の菌類版ファールブルのような方だなあと、感心してしまいます。

この山は、他にも「身近な自然発見講座」など様々な博物館行事のフィールドでもありますし、友の会オープンラボでも、講座のたびにお世話になっている場所です。今後、博物館とともに10年20年と息長く観察を続けていくことにより、一朝一夕にはならない貴重なデータの蓄積がなされていくことを期待しています。

博物館の観察会に参加された方は、そこで得たことを持ち帰り、是非、ご自分でも身近なところを一つ決めて、継続的に自然観察をされてみてはいかがでしょうか。場所を選ぶ際には、そこが良いところかどうかということよりも、楽に！頻繁に！通えることが先決です。ですから、ご自宅の庭や通勤通学途上の公園などが寧ろ適しているかもしれません。そして、まず、そこに住む生き物の戸籍簿作りからはじめます。名前のわからない生き物がいたら、学芸員に気軽に相談してください。そして、生き物マップを作ってみても良いでしょうし、季節変化をカレンダーにして、年ごとの違いを読みとるのも良いかもしれません。

このように、自分なりの身近な自然誌を編纂するのは楽しいものです。当博物館の樽学芸員親子は、自宅の周辺で動植物から菌類に至るまでいろいろな生き物を記録されています。

私は、隠花植物を担当していますが、いずれも大変地味で小さな生き物たちです。しかし、これらの小さな生きものにも親しみがわいてくると、身近なフィールドが賑やかで楽しいところに変身します。うちの庭は猫の額ほどとか、マンションなのでベランダだけ、と言う方もおられるでしょう。そういう方には特に小さい生き物 watching をおすすめします。駅の植え込みや、コンクリートの壁でも、十分な観察



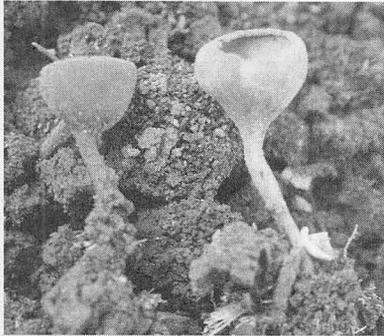
入生田横道の植え込み

フィールドとなります。

入生田駅から博物館までのほんの3分間の道のりでも、腰を据えて観察をはじめたら丸一日を費やすでしょう。改札口を出た右側には花壇がありますが、雨が当たらないところは土が乾き、猫のトイレになっています。昨年4月1日には、そこから高さ10cmに及ぶ見事なヒゲカビが発生して感激しました。ヒゲカビについては調査を行い、歩道橋階段直下なども穴場だということがわかりました！

この歩道橋階段の右手にはヤマグワの木が生えています。実が食べ頃の初夏、地面に落ちた実には、綿のようなクモスカビが見られます。樹上では、熟れた実に混ざり、時折白く固くなった実が見つかりますが、これはキツネノワンというキノコの仕業

です。このような実は落下して、翌春、そこから茶碗型のキノコを生やします。秋になると葉の裏面に、ウ



キツネノワン

ドンコ病菌の黄、赤、黒色の丸い粒が見られます。この粒には、放射状に刺が生えており、拡大してみると芸術品！です。駅から続く石垣の表面をずっと見てくると、色とりどりのコケや地衣類が、ざっと10種前後見つかります。私の場合毎日ここを通りますから、何かひとつでもいいから、その日発見した生き物や、観察した内容を一年も記録していけば、この3分間ルートでも結構楽しめそうです。

しかし、小さい生き物達には本当に際限がありません。時間のあるときに、花壇の土をひとつかみ持ち帰ってみます。これをツルグレン装置という器具にかければ、ダニやトビムシなど賑やかな土壤動物たちに出会えます。ひとつまみの土を水に溶いて窓辺に置き一週間もすればプランクトンの饗宴が始まりますし、寒天培地にまけば、数十種のカビが現れます。ともに出現したアメーバや線虫などを捕まえる食虫植物のようなカビがいたり、胞子をダニの足にくっつけようと粘液を出すカビがいたり、様々な物語が見えてきます。徹底的に調べ出したら、この3分間ルートに合計何種の生物がいるか想像もつきません。おそらくま

だ名の無い種も発見されるでしょう。顕微鏡を介すことで、身近なところに、際限なく面白い世界があるらしいとわかるのです。

博物学者南方熊楠は、次のような言葉を残しています。「無尽無究の大宇宙の大宇宙のまだ大宇宙を包蔵する大宇宙を、たとえば顕微鏡一台買うてだに一生見て楽しむところ尽きず（土岐法竜宛書簡より）」青木館長は、「“ダニ” 一生見て楽しむ」と読むのだよ！と洒落て喜んでおられるのですが、こういう世界が本当に文字通り、身近なところに無限に広がっているのです。

アジアには、古くから精霊信仰（アニミズム）という、原始的宗教というか自然観のようなものがありますね。身の回りのあらゆるところに神様が住んでいるという思想で、日本でも、かまどの神様、石ころの神様、老樹の神様といろいろいますが、貧乏神とか、便所神なんていうのもいて面白いと思います。直接は目に見えないカビとのつきあいは、何かこの、アニミズムの自然観に似ているなという気がします。駅から3分間ルートでいえば、毎朝、私はクワの葉裏に生えるカビ様、クワの実に生えるカビ様、猫のウンチに生えるカビ様…たちに挨拶しながら博物館に通ってくるわけです。こういうのを、「八百万（やおよろず）のカビカビ」と称してはどうかなど、こっそり楽しんでいます。私はカビたちの世界にすっかり魅せられてしまい、毎日顕微鏡を覗いています。しかし、この身近なミクロの世界は、ルーペひとつを携帯するだけでも十分垣間見ることができず、何度か顕微鏡観察を体験されれば、きっと「八百万のカビカビ」の気分をおわかりいただけるはずです。

もちろん、“神々”はカビカビばかりではありません。わたしたちの身の回りには多様なサイズの無数の生き物たちが生活を営んでいます。身近なところで養った観察眼、自然観は、必ずや、皆さんの生活を豊かなものにしてくれるはずです。これだけ科学が進展しているはずの世の中にも、ごく身近なところに生き物たちの未知の世界が広がっているらしいということに気付くと、われわれヒトは少々思い上がってるんじゃないかな？という気もしてきます。環境や多様性保全の複雑な問題に向き合っていくためにも、まずは身近にしながら気がつかない隣人たちに目をやり、身近にある自然を謙虚に見つめることも、案外、大切な一歩かもしれません。

◆◆ 夏休みオープンラボ講座 ◆◆

8月7日(土)、8日(日)、14日(土)、21日(土)
参加者 102名 ほか付き添い参加者

7月24、25日の日本変形菌研究会『2004箱根大会』に共催事業として参加したため、「夏休みオープンラボ」は、8月に入ってから4日間の開催となりました。予約制の講座は1件で、他は当日のお楽しみ企画という新しい方式で実施しました。ここでは概略のみの紹介となりましたので詳細はホームページをご覧ください。

<http://homepage3.nifty.com/open-lab/>

ミニ講座「ミクロの生物ウォッチング」

8月8日(日) 参加者 15名

講師：小田部家邦氏 出川洋介学芸員

◆クマムシに出会う

ごく小さな生き物であり、不死身の体を持つといわれるクマムシ。SF映画に登場しそうな得体の知れないこの生き物を、趣味にしていた絵に百鬼夜行の妖怪達とともに描いたことが、生きたクマムシとの出会いにつながりました。講座の準備をしながら、「現在生活しているクマムシを自分の目で見る」という私なりの目的のために、道ばたのコケ、側溝の泥などを採集し、ドキドキしながら顕微鏡をのぞいてこまめに探す作業の繰り返し。「独特の爪、もしや？」と思ってから、それがクマムシとわかるまで終始興奮していました。それはもう、私が子どもと図鑑で見て想像をふくらませていた生き物よりずっと、健気で一生懸命生きている種という印象でした。妖怪ではなく、どっこい生命をつないできているクマムシに新鮮な感動をもらいました。(企画担当 鶴田知志子)



博物館周辺の田んぼでプランクトンを探しました

◆参加者の感想

「ミクロの生物ウォッチング」に参加して

今回参加した「ミクロの生物ウォッチング」では、いろいろな生物を観察できましたが、その



中でもヒルガタワムシとケンミジンコの幼生がとくに観察できてよかったものになりました。

カット 鶴田知志子 ミジンコがどうやって成長するのか知りませんでした。ミジンコの中でもケンミジンコだけが脱皮するというのを知りました。

また、ヒルガタワムシを見つけた時、小田部先生に、「ヒルガタワムシは繊毛を回転させてエサを探る」ということを教えていただき、その様子を見せていただきました。ミクロの生物の体の一部を回転させているところなど見たことが無かったのでとても印象に残りました。

その他にもさまざまなことを学ぶことができ、大変有意義な時間を過ごせました。

(深山 遼 中1)

…その後

◆8月14日(土)「クマムシ団地」発見!

8月8日(日)の観察会で「クマムシ」の話聞き、自宅のエアコンの凝縮水が流れる場所にあった「湿った落ち葉と土」を採取し、水に入れたサンプルを持参。そこから大量の「クマムシ」が見つかりました。プレパラート上に乗せた1~2滴のサンプルのどれからも見つかるというほど、沢山いました。

夏休みの自由研究、おかげさまで無事完成致しました。長男はミジンコにすっかり魅了(?)され、博物館にあったような顕微鏡が欲しいなどと言いだす始末で、この「ミジンコブーム」はいつまで続く事やら…私自身も楽しく観察に参加でき、今までに関心も無かった事に新たな感動を見出す機会になりました。

(深山アコ、遼さんのお母さん)

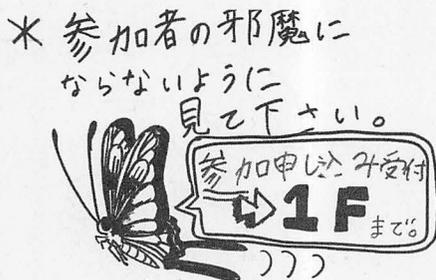
「小さな探検隊」

8月7、8、14、21日 参加者 38名

今回の探検隊長は6年生の小沢有輝さんと鶴田達也さんが分担しました。昆虫採集前後の注意事項の説明、採集の時の参加者へのフォローなど、立派に任務を果たしてくれました。

この講座では、前半は昆虫採集、後半は捕まえた虫の標本を作成します。今回は全4日間、午前と午後の全8

回で38名が参加しました。参加者の年齢は3歳から12歳、平均年齢は8歳でした。神奈川県内のみならず、浜松市や新潟市からの参加者も見られ、兄弟やいとこ同士での参加もありました。昆虫は主にイチジクに来ていたキボシカミキリやクワカミキリ、バッタ、カマキリ、トンボなどを捕まえる事ができました。標本作成だけでなく、一部の回では顕微鏡観察もしましたが、好評でした。(企画担当 松本洋一)



案内板作成 加賀芳恵(中2)

「葉っぱでスタンプ」

8月7、8、14、21日 参加者 22名

身近にあるサクラ・イチョウ・モミジなどの葉の形や鋸歯、葉脈の観察を兼ねて、葉の拓本をとって遊んでみました。

拓本は、葉に直接スタンプインクをつけて、紙にこすり出す手法で行いますが、これがまた意外にシャープな線が出て、「すごい」、「きれい」の連発。せっかくでするので、記念にハガキとうちわに仕立ててみました。参加者も3歳児からと、今年は低学年の子どもたちが多かったのですが、個性豊かな作品がたくさんできて十分に楽しめた企画となりました。(企画担当 星野和子)



「ホラ！上手にできたよ。」

「どんぐりコロコロ」

8月14、21日 参加者 13名

どんぐりをつける木の葉と実を観察して名前つけを行った後、葉を名前といっしょにラミネート



カット 稲垣香織里

して1枚の「どんぐりの葉っぱシート」を作り、どんぐり細工をしました。

おじいちゃんから孫までの参加があり、皆様に楽しんでいただけました。(中には“ついで”で参加した人が一番ハマッてしまったご家族も) かわいいどんぐり細工は多くの方に喜んでいただけました。意外だったのは名前付けの段階と葉っぱシートの反応が良かった事です。どんぐりの種類分けなどはクイズ形式にしたのが楽しかったようです。シートも「これなら名前と葉っぱがばらばらにならない」と、喜ばれました。

今回は1回の募集人数が少なかったため、一人一人にじっくりと時間をかけて接する事ができ、1年かけてどんぐり拾いから準備した企画者として、とても嬉しかったです。

(企画担当 稲垣香穂里)

「水滴顕微鏡」 講師 大谷明寛氏

8月21日 参加者 14名

土壌動物観察会でいつもお手伝いをいただいている大谷さんから提案があり、1時間の講座として初めて実施しました。

照明装置はダンボールで作った台に透明のアクリル板を貼り付け、顕微鏡は弾力のある薄いプラスチック板にピンホールを開けた黒紙を挟み、そのピンホールの真上に1滴の水を置くだけの簡単なものです。観察するのに最初はコツが必要ですが、なれるととてもクリアーに高倍率の観察ができます。ササラダニの足の毛も観察できました。

初めて顕微鏡を研究に用いたレーウエンフックはツリガネムシ(1683年) バクテリア(1683年) や毛細血管の血液の流れ(1688年) など発表しています。レーウエンフックが見たミクロの世界を体験できました。(企画担当 町田 誠)

岩石標本を作ろう

地学グループ報告・ホットな感想集めました！
7月25日(日) 参加者 子ども13名、大人9名

一日コース 酒匂川河原の採集と館内標本作り

- ・自由研究にするのは難しいけど先生の人がよくわしく教えてくれたので、作れると思う。
- ・メモをしなかったのが私の反省点、一つ拾っては一つ名前を決めるという先生のはじめの方法を忠実に守ればよかった。そうすればその時にメモができた。ゆっくりまじめに勉強してからはじめて楽しめるものと思いました。
- ・いしひろいしたことがたのしかった。(6才)
- ・はじめてのけいけんだし、石の名前がいろいろわかって、とてもうれしかった。／お蔭様で親子ともども楽しい一日を過ごすことができました。次回もぜひ参加したいと思います。
- ・石ってきれいだなと思いました。／実際に河原で採集でき、小さい子にもわかりやすく楽しかったです。家に帰り、本でまた調べてみます。



「僕の石はどれと同じだろう？ 緑色の石の仲間？」名前を確認にくると、地学スタッフと楽しい学びのやりとりが始まる。

8月21日(土) 参加者 子ども16名 大人4名

半日コース 博物館内の標本作りのみ

- ・来年は酒匂川に行って、採集に参加したい。
- ・川にある石は全部同じようなものだと思っていたがいろいろな種類があって興味を持てた。
- ・石のでき方などについてもわかったので、よかったです。
- ・学校の中でも標本の説明くらいにとどまってしまう、身近な石までよくわからず、今回とても勉強になりました。
- ・今年は石川町(福島県)で採集した岩石・鉱物に関して本人がまとめたものを最終段階で先生に見ていただき自由研究として仕上げる事ができました。石の名前が分かってよかった。

フジアザミの群落を訪ねて

第18回植物観察会報告・富士山
8月27日(金) 曇り後雨 参加者50名

前日から気になっていた天候だが、当日朝は幸い雨ではなく、山に入ってから怪しい、と心配しながら家を出る。10時頃新五合目駐車場に到着。バスを降りると目の前に早速フジアザミの大きな花が目につく。すぐ近くに淡紫色の鐘形に開いたクサボタンが見える。出発にあたって勝山



ペン画 山本絢子

先生から富士山に関わる植物についてレクチャーがあり、先生を先頭に登る。細い山道なので長い列となって進む。先生の話の直接聞けるのは先頭の一部の人達だけではあったが、植物の種名については後続の人達のために植物に名札が付けられており、確認できた。数が多くて私などは記録するのに精一杯であった。家に帰って図鑑と照合するのが大変な作業と思われた。12時少し過ぎに幕岩に着く。ここは岩の広場と言った感じで廻りが緑に囲まれた気持ちの良い場所で、新鮮な空気を十分に吸い込んで食事をとった。天気が良ければ至福の時であったと思われる。幕岩を出る13時頃に案の定、ぽつぽつと落ちてきた。全員雨具を付けて出発する。樹林帯を登ると富士山特有の広い火山砂礫地に出る。この頃には雨足も強くなり、記録は面倒になってしまった。この辺りのカラマツは風衝地のためかハイマツのようになっていた。双子山下を通過する頃には一段と雨足が強くなり、濃い霧の中を黙々と駐車場に向かって下りた。バスの姿を見た時にはほっとした。晴れていれば火山砂礫地に植物が侵入し荒原—草原—森林と群落が移り変わる変遷が一望できたのではと心残りでありました。最後に私としては新しい発見があり、久しぶりの雨の苦しい経験をし、有意義な一日でした。(参加者 日下正武)

水餓鬼を育てよう！ Part2

自然倶楽部報告・早川水辺の観察会と体験楽修
8月21日(土) 参加者 子ども12名、大人19名

- ・国道1号バイパス工事による周辺環境の変化と早川水系自然博物館の創造について現状を解説
- ・水辺の観察会「河原の岩石」「川の生きもの」
- ・「ストーンアート」「焚き火で竹パンを焼こう」
- 「水遊び=石投げ・ダムづくり」

5日前の下見では石に苔が付いて滑り、水は臭く、丈の高い草が水際まで生えていた。2日前の大雨で増水、川の状況は一変！冷たくてきれいな水、苔も流れて草も支障なし。雨予想もはずれて薄日の差す絶好の水餓鬼日和となった。

『川という自然の恵みの楽しみ方』

お友達に誘われて、普段なかなかできない体験をさせてやれそうだと、楽しみに参加しました。観察会では、普段進んで参加する事の苦手な息子が珍しくきちんと話を聞いて取り組み、思わず私も真剣にメモを取っていました。教えてくださる方皆さん優しく分かり易いお話でした。何もいなしに見える川でも多くの種類の生きものがあることに驚き、色の違う石がすべて同じ仲間であることも覚えました。



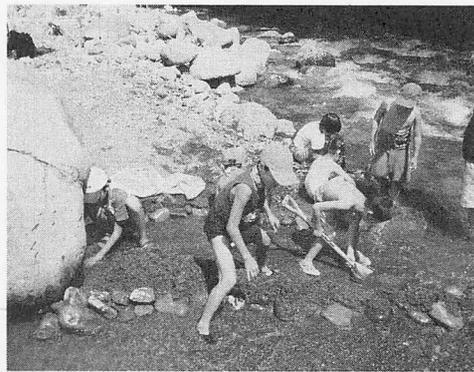
「安山岩」もう忘れません！木の棒と板をこすって焚き火の火を起こし、パンをこねて竹に巻いて焼き、石の名前を聞いて絵を描き、川へ恐る恐る入って水遊び…体験しながらの学習は楽しく、川という自然の恵みの楽しさを満喫して、帰りはぐっすりでした。早川の、河童の夢でも見ていたのかな？
(参加者 柏木牧子)

早川に昔から住んでるKappaです！川遊びが得意だよ。ずっと仲良くしてね。(画 MAKO)



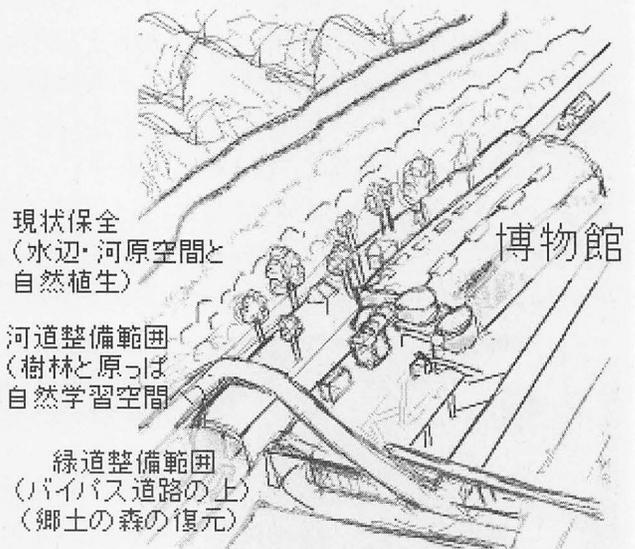
友の会自然倶楽部

会員の皆さんも、ご意見やアイデアをお寄せください。イメージイラスト大歓迎です。お手紙・FAXは、博物館友の会自然倶楽部まで
(佐藤)



博物館と横を流れる早川の間、水辺の学習空間を作りたいと願う「早川水系自然博物館の創造」に

ついて、昨年今年とアンケートをとった。大きな事業にどれだけ私たちの声が反映されるかどうかは未知数、でも夢を描こう！水餓鬼たちのキラキラ輝く目を育み、明日につなげたい。



小田原側上空からのイメージ図

考案：Kappasa (佐藤昭男) 図作成：櫻井 武 2004.8

『参加者からの声』

- ★カルバートの上はシロツメクサの草原に、虫や鳥が来るように樹木を植える。管理棟を設ける。
- ★川の向こう側へ渡れる橋があると、水生昆虫の観察に便利だと思う。
- ★河原の自然環境を残して下さい。
- ★土木系ではなく、生物系での経済効果や活性化ができれば、皆さん投票すると思う。
- ★子どもたちは自然の中で遊びを見つけていくものだと感じている。「ここではこう遊ぶんだ。」という作られ過ぎた遊び場ではなく、安全とのバランスに気を配りながら、自然の中で思いっきり遊べる場にして欲しい。泳げる淵があると良い。
- ★なるべく手を加えないで残した方が良い。博物館施設として水遊び後のシャワーなどあるといい。
- ★河原の自然環境を復活させるような整備が必要。

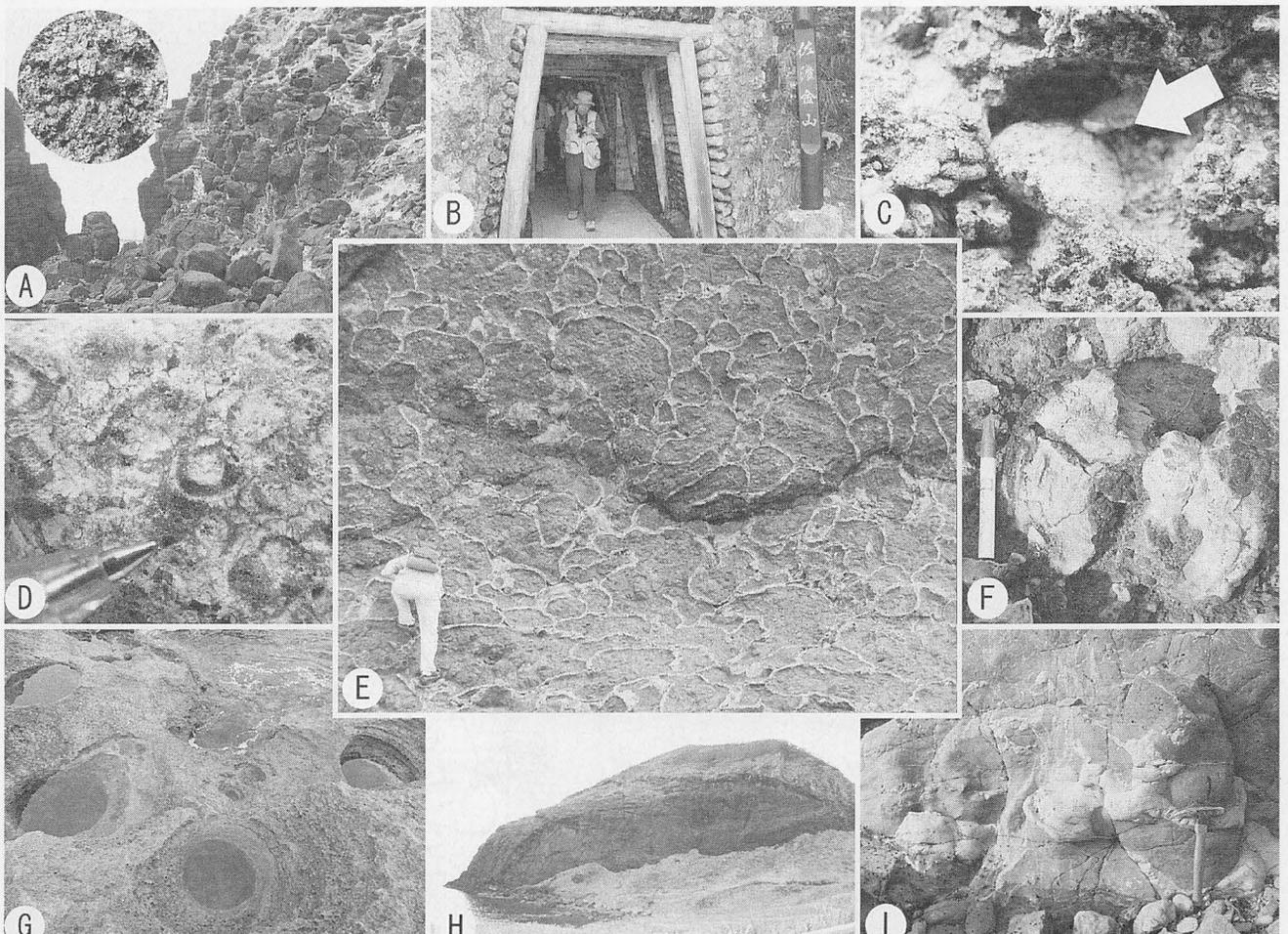
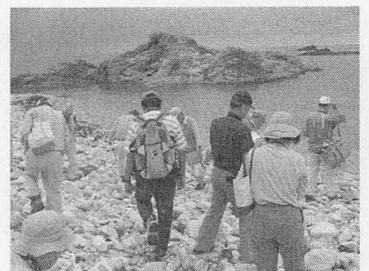
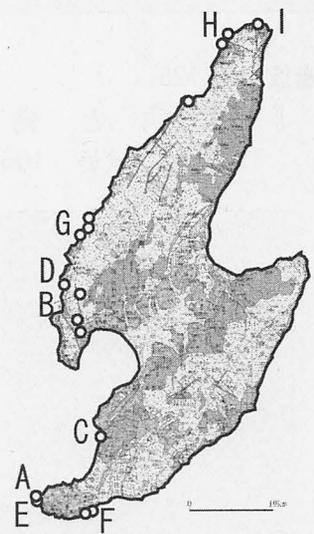
『佐渡島特別巡検』報告 9月3日(金)~6日(月)

〈佐渡島巡検あらまし〉

陸続きでないところの巡検は初めての上、台風の当たり年で天気予報に気を揉みましたが、好天に恵まれ往復の海上も静穏で連絡フェリーは滑るよう、波打ち際での観察や採集も安心して行え、島での2日間をフルに回ることができました。観察ポイントは海岸沿いが多く、露頭の岩石の観察とともに小木や外海府の海岸ではその開発の手の入らない風光を嘆賞しました。

さて、右地図の○印が巡検 Stop 地点。その中からピックアップしてみます。図Aは、今回のハイライトであるピクライト質玄武岩です。カラーでお目にかげられないのが残念。佐渡の定番といえば金山(図B)。坑道跡を堪能。図Cは、中新世の示準化石&熱帯~亜熱帯の示相化石、ミオジプシナ(有孔虫化石)。図Dは、海岸で拾った球顆流紋岩。赤青緑と様々な転石を採集(右写真)。図Eは、小木での枕状溶岩大露頭。展示室の壁よりもスゴイ迫力。近くではオリビン砂も採集。図Fは、枕状溶岩が割れたピローブレッチャーとハイアロクラスタイト。露頭よりたらい船の方が気になる人も。図Gは、天然記念物となっている波食甌穴群。貝化石を含む1500万年前の地層に波食により穴があいたものです。図Hは、初夏にカンゾウが咲き乱れる大野亀。頂上からは段丘面の観察。図Iは、巡検最後のStop、基盤岩類に見られた枕状溶岩。ここでは某学芸員が「スゴイ、スゴイ!」と大興奮。秋田巡検につづく日本海側巡検は楽しく閉幕しました。

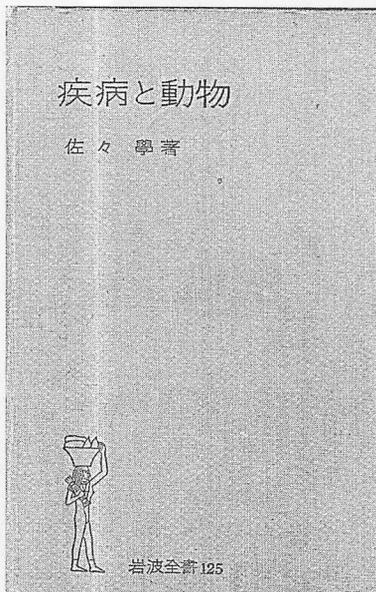
(地学グループ 新藤誠一郎、学芸員 田口公則、同 山下浩之)



岩波全書 125

『 疾 病 と 動 物 』

佐々 学著 1950年 岩波書店発行



「なんでまた、よりによってダニの研究者になんか、なったんですか？」とよく聞かれます。面倒臭いから「そりゃあ、ダニが可愛いからですよ。」と答えると、みんな「エーッ！」と、のけ反ってしま

ます。ここでは本当のことを述べましょう。

ぼくが小学生の頃は、今と違ってテレビもテレビゲームもなく、マンガといえは「のらくろ」ぐらいしかありませんでしたから、学校から帰るとみんなそれぞれに違った楽しみを持っていました。ぼくの場合は切手集め、模型電車づくり、昆虫採集の三つでした。しかし、少ない小遣いでこの三つを続けることが難しくなってきました。小学校5年生のときだったと思います。ぼくはこのうちのどれか一つだけにしようと決心しました。でも、どれも楽しくてやめたくありません。そこで、サイコロの代わりに鉛筆を転がして決めることにしました。6角柱の鉛筆の6面に切手の「キ」、模型の「モ」、昆虫の「コ」を2か所ずつ書いて10回転がしました。そうしたら、「コ」が一番多く出たのです。それを機会に切手のコレクションと何台も作った模型電車と機関車はみんな友達にやっしまい、昆虫採集だけに専念することになったのです。その時は大して考えもせずやっしたことですが、これがぼくの人生を決めてしまったのです。「コ」がでたからこそ、後にダニの研究の道に進んだのであって、もし「キ」か「モ」が多く出たら、今頃はきっと銀行員かJRの職員か、なにか他の職業についていたことでしょう。

さて、ではなぜ昆虫がダニに変わったかというところ、ここに1冊の本が登場します。大学に入ったとたん、ぼくは何を研究テーマにしようか、迷っていました。そもそも、ぼくは相当のひねくれ者、天邪鬼で、なんでもみんなが騒ぐもの、一番人気があるものにはソッポを向いてしまう性格です。ですから、研究のテーマにしても、だれも研究していないものをやりたかったのです。昆虫類には多くの研究者がいるので、なにか昆虫以外の生物を狙っていましたが、なにがいいか分かりません。その時偶然手にしたのが佐々学著『疾病と動物』という小冊子です。著者は当時東京大学伝染病研究所（現在の医科学研究所）教授で、この本にはゴキブリ、シラミ、ノミ、カ、アブ、ハエなど衛生上有害な動物について解説がされており、最後のほうに「ダニ」という章があつて、その中にササラダニ類のことが次のように記されていました：「隠気門類 この類はコウチュウダニ類またはササラダニ類とも呼ばれ...（中略）...自然界に広く分布して自由生活を営んでいるが... 我国のこの類のダニはほとんど研究されていない。40科近くに分かれて多数の属を含み、極めて珍奇な美しい形をしたものが多い」と。これを読んだぼくはすぐに「これだ！」と決めてしまいました。「ほとんど研究されていない」と「極めて珍奇な美しい形」に強くひかれてしまったのです。それから50年、ぼくは脇目も振らずササラダニの研究一筋にやってきました。発見した新種のダニは450種を越えました。他のことは何も知らない非常識研究者です。1本の鉛筆と1冊の本がぼくの人生を決めてしまったのですが、まったく後悔はしていません。偶然に感謝しています。



カット 八木 逸

“パホイホイ溶岩 アア溶岩って何？”

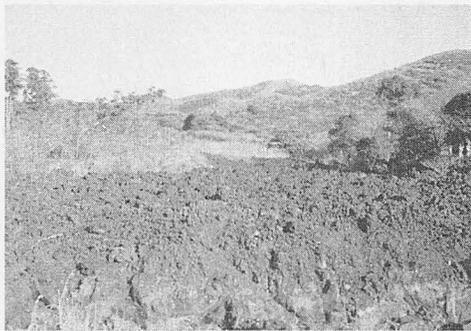
我々日本人にとって火山は耳慣れた言葉です。先日も、浅間山の小規模爆発、三宅島では火山活動により住民の避難が続いています。多くの被害に対し火山の研究が続けられていますが、大自然の威力に対して、先が読めません。その火山によってもたらされる溶岩には、玄武岩、安山岩、流紋岩などがあげられます。今回、友の会通信の編集長から「パホイホイ溶岩 アア溶岩って何？」と聞かれ、ハワイ（ポリネシア語）では、

パホイホイとは、滑らかな意味を指し、表面が滑らかな溶岩をパホイホイ溶岩。



パホイホイ溶岩

それに対しアアとはゴツゴツした意味を指し、表面がゴツゴツした溶岩をアア溶岩、アアアッ痛いと言う語源を持つと返事をした所、それを友の会通信に書いてくださいとの事。ポリネシア語はさておき、この2つの溶岩は玄武岩で、安山岩に比べると粘性が低く、サラサラと



アア溶岩

流れます。これらの溶岩は先程も述べたように形から名前がつけられ、学術用語にもなっています。ハワイでは、パホイホイ溶岩は火口から静かにあふれ出し、ゆっくり冷え固まり、下流部分ではアア溶岩に移行する例が多く、アア溶岩の表面はガスが抜けた穴が多く凸凹しています。この上を歩いたら日本人でも「アアア」と言ってしまうのではないのでしょうか？

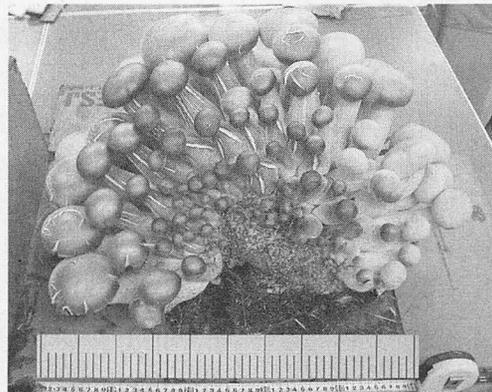
(広報グループ 永井たまき)

巨大キノコ発生！求むニオウシメジ情報

9月10日、出張先で携帯電話が鳴りました。博物館からで、至急、藤野町教育委員会に電話をとのこ。小学生の頃からキノコの師と仰ぐ力石悟さんからで、ニオウシメジという巨大キノコ発生のニュースです。樽学芸員と直行しました。現場の草むらに到着した頃、辺りは暗くなっていましたが、闇の中にポーッと浮かび上がる巨大な塊に戦慄が走りました！高さ40cm、重さは約10kgで数十本のキノコが束をなしています。手を添えて持ち上げようとする、キノコの直下は人肌のように暖かくなっています。小さな子どもほどもある巨大ニオウシメジとの初対面に大感激です。力石さんと藤野町のご厚意で、博物館に寄贈して頂き、目下フリーズドライ標本作成中です。ニオウシメジは熱帯性のキノコですが、神奈川では1985年に初めて発見され、翌年続けて津久井に発生したものは170kgに達し！ギネスブック掲載とのこと。16日付け新聞に相模原市内でも発生の記事があったと企画部草山さんから伺いました。警備員さんは藤沢市長後産のよく似たキノコを見たことがあるとのこと。滝田さんからは18日に横浜市でも発見との情報が入りました。猛暑のせいか、各地で多発しているようです。非常に美味しいとのことで、秋の味覚も大いに楽しんで頂きたいと思いますが、もし近所でこの巨大キノコに遭遇されましたら、食べ尽くす前に記録を取って傘のかけただけでも標本用に残してご連絡下さいますと助かります。野菜畑や空き地の草むらのようなところに生えます。

連絡先：degawa@nh.kanagawa-museum.jp

(出川洋介 学芸員)



ニオウシメジ

会員からのお便り

植物ノート「カンアオイの不思議」に寄せて

臼井英夫

6月の通信に、植物観察グループの記事でカンアオイのことが書かれていました。私もギフチョウの飼育用に栽培しています。

2年ほど前になりますが、タマノカンアオイの種子を娘の通う学校で採集し蒔きました。翌朝、種子をまいたプランターにたくさんの赤アリが集まり、種子を運び出していました。本によれば、カンアオイの種子に付いている脂肪の塊がアリの好物で、アリによって分布を拡大するようです。アリに種子を運んでもらえば数mは移動できるのでしょうか。種から花が咲くまで4、5年かかるので、条件がよければ年平均1m位は生育範囲は広がるのではないのでしょうか。1000年で1km、10万年で100km。気の長い話ですが、結構広く広がるのではないのでしょうか。

《学芸員からのコメント》

学芸員 勝山輝男

カンアオイの種子がアリ散布だということは、種子にエライオソームという、アリが好む高栄養の付属物があること、果実を地面の近くに置いていることなどから、植物界ではよく知られています。ただし、種子の大きさが大きいので、非力なアリにはあまり遠くまで運ぶことができず、そのうちエライオソームだけ外して持ち去ってしまい、結局、カンアオイ類の種子散布は他のアリ散布植物ほどは遠くに運ばれないそうです（林実，1937. 植物研究雑誌，13:699-700）。植物ノートを書かれた中島さんもそのことはよく承知していました。中島さんの意図は、種子散布は親株から遠くへ種子を運ばせることだけでなく、親株の近くに種子を留めるメリットもあるということです。そのために、種子散布の遅いカンアオイ類を例に出し、その説明として、1万年にせいぜい1kmという前川説（前川文夫，1953）を引用されたようです。話を単純にするために中島さんは前川博士の説をくわしくは書いていませんが、前川博士も林（1937）を参考にして、種子がアリに運ばれたとして最大1年に1mと推定、小さいほうの1年に1cmとの中間をとって、1年に10cmと考えると、1万年に1kmとなり、地史とうまくあうと

いうことです。この計算が妥当かどうかは意見が分かれるところですが、多くは臼井さんと同様にカンアオイ類の種子散布距離はもう少し大きいのではというものです。カンアオイ類の種子がアリ散布されるとして、どのくらいの距離を運ばれるのか詳しい研究はまだされていないようです。

情報クリップ

★ご存じですか？

5月9日に開催された昆虫採集入門講座にあわせて、博物館エントランスホールにあるミュージアム・ショップで、昆虫標本作製用具の販売を開始しました。特に消耗品については、来館されたついでに手に入れることができますので、是非ご利用ください。取扱品を紹介しますと、

金属製引抜き式 6300円・殺虫管 840円・三角紙ケース 1365円・三角紙（大中小50枚入）315円・ピンセット 945円・展翅用玉針（50本入）945円・ドイツ型標本箱 8400円・有頭シガ昆虫針（2号）262円です。

在庫が切れている場合もありますので、売店へご確認ください。随時補充をしてくださるそうです。

★新シリーズ・「ナチュラ・ノート」

すでにお気づきの方も多いと思いますが、前号の『友の会通信』第45号から、「植物ノート」に代わり「ナチュラ・ノート」の連載が始まりました。このコーナーでは、友の会各分科会での自然科学に関わる学術的な調査・研究発表を取り上げる場としましたので、取り扱うジャンルやテーマも多岐にわたります。

ネーミングについては、このことを視野に入れ、natureの語源となるラテン語のnatura（ナチュラ）を採用しました。ご愛読ください！

会員状況 8月31日現在

個人：405 家族：206 合計 611

報告 第62回サロン・ド・小田原

9月9日（木）

「南洋の楽園小笠原の現状と未来」

荻部治紀学芸員

参加者：講演会31名、茶話会21名

友の会 NOW

私たち友の会役員の任期2年間も残り半年となりました。限られた時間とメンバー、そして予算で、会員の皆様が期待する運営ができているだろうか、疑問に思いながら会の運営に携わってきましたが、如何でしょうか。この「友の会NOW」を通して、少しでも友の会の事情をご理解いただき、自主運営にご協力いただけるように発信させていただきました。会員の中にはこのような情報を不快に感じた方もいらしたかと思いますが、「博物館を広く活用し博物館活動を支援するとともに、会員相互の交流を図ること」を目的とする友の会の運営を考えてのことですので、お許しいただきたいと思います。ミュージズフェスタや広報グループなどの協力者には感謝しております。600余名もの会員組織を担っていくための運営方法は今までの「友の会NOW」に記載させていただきましたので改めて述べませんが、残された半年で運営課題を整理し、来年の総会(3月20日)で提案できればと考えています。

前回の総会で濱田会長が提言された、「博物館“友の会”白書を皆で真剣に考えようではありませんか！」を実践する半年と思っていますので、ご意見などを友の会事務局宛にお願いします。友の会運営にスタッフとして参画したい方は、是非、名乗りを上げて欲しいと思います。

来年は10周年を祝う、『ミュージズフェスタ2005』が3月20日(日)～21日(祝)に開催されます。この節目に相応しい飛躍ができることを祈って、皆様の声をお待ちしています。
(友の会副会長 佐藤昭男)



友の会通信の発送作業 会議室にて

◆◆ 第63回・第64回 サロン・ド・小田原のお知らせ ◆◆

第63回 サロン・ド・小田原 11月11日(木)

『白馬連峰の花』

高橋秀男(生命の星・地球博物館名誉館員)

“花の白馬・・・”語感のよいキャッチフレーズをもつ白馬岳は北の大雪山、南の北岳とともに日本における三大高山植物の宝庫である。亜高山から高山にかけて、生育する高山植物は345種を数え、中部山岳の高山ではだんとうにつに種類数が豊かである。

白馬岳は日本海側に位置し、いわゆる日本海側要素と呼ばれる多雪地に適応した種類が多い上、地形が他の山岳に比べ変化に富み、山麓の夏緑林から稜線付近の低小草原まで、変化に富んだ植生帯が発達している。ほかに植物の生育に特別な影響を与える蛇紋岩や橄欖岩などからなる超塩基性岩や石灰岩が露出している所が多く、ここに好んで生える特別の種類が多い。

私が白馬岳へ足を踏み入れたのは1951年、以後機会があるごとに植物調査に登山し、神奈川県立博物館研究報告3号には『白馬後立山連峰とその東方山麓のフロラ』として一冊まるごと特集号としていただいた。1991年からは白馬村から依頼を受け、村誌の植物部門の編纂に携わった。これらの調査のなかで八方尾根に、ハップウタカネセンブリやハップウウスユキソウなどの蛇紋岩変型植物を新たに発見した。サロン・ド・小

田原では美しい高山植物の数々に加え、調査で明らかになった様ざまな話題の高山植物を紹介する。

第64回 サロン・ド・小田原 2005年1月13日(木)

『小田原市域で縄文の海を復元する』

松島義章(生命の星・地球博物館名誉館員)

縄文時代の中ごろは地球規模で温暖化が進み、相模湾沿岸の海水温は現在より2℃ほど高く、しかも海面も2～3m高い位置に達していた。そのため現在の海岸に近い小田原城の内堀にまで海水が浸入し、旧市街地一帯は広く海となっていた。国府津の森戸川沿いでは下曾我付近まで泥深い海となっていた。大磯丘陵の押切川沿いでも現在の海岸線から約2km上流の小田原一厚木道路付近まで海水が浸入して幻の古中村湾が形成されていた。これらの海には現在の相模湾に生息していない多数の貝類が見られ、豊かな縄文の海となっていた。この海の様子を各地から産出するいろいろの貝化石から復元する。

サロン・ド・小田原の講演では、学芸員や外部の研究者等により様々な話題が提供されるとともに、つづく茶話会では演者を交えた参加者同士の交流が行われています。このサロンはどなたでも参加できる会です。[友の会・博物館共催] 詳しくは行事案内をご覧ください。



◆第 63 回サロン・ド・小田原
「白馬連峰の花」

【日 時】11月11日(木) 16:30より受付
【場 所】生命の星・地球博物館1F講義室
お車は箱根側屋外の第2駐車場をご利用下さい。
【講 演】17~18時 (西側講義室) ※申込不要
【茶話会】18~19時半(東側講義室)
※事前申込制、参加費は大人1000円
【申込み】講演会はどなたでも参加できます。
茶話会に参加される方は、はがき、FAX、
Eメールで友の会事務局へ。
【問合せ】田口 tagu@nh.kanagawa-museum.jp

◆第 64 回サロン・ド・小田原
「小田原市域で縄文の海を復元する」

【日 時】2005年1月13日(木) 16:30より受付
場所、その他は同上です。

広報グループ・編集部より

◇“何でも好奇心”への質問が数件寄せられました。早速にありがとうございます。適切な取材先や方法を検討してご返答差し上げますので、しばらくのお時間をいただきたいと思います。

◇今回の46号は、10・12月合併号としてお届けしました。友の会通信は、平成16年度の事業計画で年6回お届けすることになっていますが、10月以降は行事も少なくなるため、2号分をまとめてページ数を増やし、内容を充実させて発行いたしました。今年度スタートしたばかりの広報グループのスタッフは未だ数少なく、技術力もまだ途上で、少々息切れている現状です。経費の節減、労力と時間の軽減を進める努力をしていますが、モノづくりのスリム化とボランティアの関わり方には、自ずと限界があります。それでもスタッフは頑張っていますので、ご理解いただければ幸いです。尚、スタッフは継続して募集しています。どうぞご協力下さい。(編集スタッフ：中村恭子、奥村千恵子、奥村卓男、星野和子、永井たまき、渡邊かをり)

◇次回の通信発送は、2月5日(土)10時から会議室で作業を行います。

◆柵山鉱物観察会「スカルン鉱物の観察・採集」
【日 時】11月20日(土) 雨天中止
【場 所】茨城県笠間市、「柵(ひいらぎ)山」

◆伊豆大島地学観察ツアー「三原山の火山地形」
【日 時】2005年1月15(土)~16日(日)
雨天決行
【場 所】伊豆大島・三原山

◆早川水系の源を探る! Part8
「芦ノ湖西岸の自然観察会」
【日 時】12月4日(土) 小雨決行
【場 所】箱根やすらぎの森から桃源台へ

◆第20回植物観察会「晩秋の尾根歩き」
【日 時】11月27日(土) 雨天11月30日(火)
【場 所】飯山観音から順礼峠へ

◆第21回植物観察会「冬の丘陵に行く」
【日 時】2005年2月1日(火)
雨天2月4日(金)
【場 所】相模湖周辺の山

** 行事への参加申込み方法 **

-詳細はチラシをごらんください-

受付は 各行事案内の申込み方法に従い、普通はがきまたは往復はがきでお申込みください。FAXやEメールでは受け付けできません。

記入は 行事名/参加者全員の氏名/年齢(学年) 会員番号/代表者の住所、電話番号、指定の必要事項などもご記入ください。

宛先は 生命の星・地球博物館友の会事務局 (主催者名を記載)までお送りください。

締切は 各行事案内に指定の期日までに必着。

その他 行事案内に指定がある場合は、FAXやEメールでも受け付けができます。

問合せ 各行事案内に担当名が記載されています。なるべく夜間にご連絡ください。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会

vol.8, No.4, 通巻46号 2004.10.2 発行

編集：友の会広報グループ

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL:0465-21-1515 FAX:0465-23-8846

Eメール: tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp